博士論文要旨

論文題名：一七世紀伊勢神道の研究

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
ショウ　ゲツ
XIAO Yue

本稿は、「後期伊勢神道」研究における人物研究と伊勢神道の「近世化」研究を総合するものである。しかし、本稿が「伊勢神道」の研究であると言っても、むしろ明清交替に代表される東アジア世界の変動期に存在した、近世初期伊勢神道家と括られる人々の言説から彼らを取り巻く時代の波紋を問うものである。

本稿では、近世初期伊勢神道の言説から、近世東アジア世界の形成期に、伊勢神宮の祠官といわれる人々がいかにして、かかる潮流に乗っていたのかに焦点に当てながら、倒叙の手法を用い、まず龍熙近・度会延佳・与村弘正の三名における神道思想をオーソドックスな方法で分析する。これはいわゆる言説の内部の分析であり、この分析によって、彼らがいかに新たな議論を展開していたのかを詳細に検討する。そして、言説の内部の分析で明らかにされたものが、なぜそのような形にとどまったのかを考える。それはそれぞれの神道論の構築を促した、近世初期という時代を一考することでもある。近世初期という時代を一考することは、近世初期の伊勢神道の歴史像を解明することである。言い換えれば、それは近世初期の時代において彼らにいかなる問題がもたらされ、彼らがかかる問題を解決するためにどうすればいいと考えていたのか、そして彼らの神道論を裏で支えていた世界観はどのようなものであったのか、といったいくつかの課題を考察するものである。

第一章では、これまで「近世的ではない」「神仏習合」の伊勢神道家と評価されてきた龍熙近を取り上げ、彼の神と神道に関する言説の詳細な分析を通じて、近世初期の伊勢神宮に生きた一人の知識人の思想的特質のみならず、すぐれて一七世紀という東アジア世界が大きな変動を迎えた際に一祠官たる彼が、いかに時代の潮流を受け止めたのかを明らかにしたい。また熙近の神道思想をもって、これまで見逃されてきたもう一つの近世伊勢神道を提示しておきたい。

第二章では、度会延佳のこれまでの歴史的評価を棚に上げ、それぞれに検討されてきた延佳の神道論と神の解釈の仕方を有機的に結びづけ、延佳の「神道」を構造的に検討する。具体的には、まず延佳の宇宙生成論に絶対的な影響を与えた「神代巻」と「易伝」また朱子学の「理気論」が提示した生成論に注目し、延佳の陰陽コスモロジーを探っていく。次に、延佳が『陽復記』『神代巻講述鈔』『神代図鈔』などで表した日本神話における天地生成の解釈を考察し、その天地生成の際における、神々の生成の意義とその役割がどのように論じられていたのかを検討する。そして神々の意義を延佳が依拠している「易伝」から探り、彼が自分の神道を「陰陽のことはり」と称していたわけを明らかにする。最後に神話が提示した神々の徳を人間が受け止める際の、その正しい受け止め方としての「日用神道」の内容とは何であったのかを明らかにすることを試みる。

第三章では、近世に入って顕在化する大規模な「お伊勢参り」「おかげ参り」「抜け参り」による群参を背景とする、儒家の「宗廟」と日本の「宗廟」との間の齟齬がどのように打ち消されたのかに関して、与村弘正の言説を素材に考えていきたい。また延佳が神道を万人に解放するうえで不都合であった「祭祀としての神道」に対して、神宮祭祀に直接参与した祠官が朱子学とともに本格的に受容された儒家の祭祀論の元に、どのような解釈を示したのか、かつ儒家の祭祀論に必ず現れる「鬼神」を、日本の神々にいかに適用していたのかを考えてみる。

第四章では、伊勢神道の近世化を問題とする。それは近年盛んになっている「東アジアの近世化論」の方法を承けつつ、言説のテキストの書き手をそう考えさせる思想的背景、その思想的背景が当人にもたらす問題、その問題を解決するための当人の解決策という三点を明らかにすることで、伊勢神道の「近世化」、すなわちその歴史像を再考するものである。第一節では一七世世紀中期までの神宮を取り巻く背景を素描し、特に仏教と儒教、または江戸幕府が実施した諸宗教政策に注意を向ける。第二節では、延佳・熙近・弘正それぞれの三教論を取り上げ、彼ら三人が神道のあるべき姿や、神道と儒教・仏教との関係をどう考えていたのかを明らかにする。第三節ではまず延佳と熙近の言説から、彼らに共通する危機感を考察する。そしてかかる危機を乗り越えるための方法としての学問、すなわち彼らにおける神典の解説の方法を分析する。

第五章では、延佳・熙近・弘正の神道論が、以降どのような展開を遂げたのかという問題に取り込む。具体的には、一七世紀後期の神宮における相次ぐ擾乱に身を置いていた延佳以降の外宮祠官が、どのような神道論を提唱したのか、それを背後で支えていた世界観にはどのような特徴があったのか、延佳たちが残した神道理論をどのように受容したのか、という三つの課題に応えることを試みる。まず中西直方を取り上げ、彼における「死」の神道論の内容を検討し、なぜ彼が前の世代の延佳たちと違って、「生死一致」の神道論を完成し得たのかという彼の神道の意義を明らかにすることを試みる。次に、中西と延佳たちの神道論の相違を彼らの神国論を通じて探る。つまり、延佳たちの開放的世界観がいかに中西の閉鎖的世界観へと展開したのかを究明し、東アジア世界の波が静かになって以降伊勢神道家が構築した新たな日本像を明らかにする。最後に、河崎延貞と喜早清在を事例として、延佳たちが残した神道論の咀嚼のされ方を論じ、一八世紀初頭期における外宮の思想状況を浮き彫りにする。また、清在による延佳『陽復記』の読み方から、近世伊勢神道における哲学から考証学への転換点を点検し、逆に、延佳らの神道論の歴史的意味を照射する。

本稿は、これまで「神道史」や日本思想史という一国史の枠組みに囚われている神道思想の研究を、近世東アジアの視野から捉え直したものである。本稿は「日本の神道」という図式を突破する一つの可能性を提起したのである

Abstract of Doctoral Thesis

Title: A study of Ise-Shinto of the 17th century

Doctoral Program: Major in Humanities
Graduate School of Letters
Ritsumeikan University
ショウ　ゲツ
XIAO Yue

This paper is a research on several Shintoist who are classified as"latter period Ise-Shinto"（後期伊勢神道） and the early modernization" of Ise-Shinto.However this paper is not to study on the construction of Ise-Shinto,but a review under the circumstance which Asia shift from the middle age to the early modern age to study these Shintoist's reception of the age change impact.
This paper's study is rely on some discourse of several Shintoist. They are WataraiNobuyoshi(度会延佳),TatsuHirochika(龍熙近),YomuraHiromasa(与村弘正),NakanishiNaokata(中西直方), KawasakiNobusada(河崎延貞),and KisoKiyoari(喜早清在).These discourses are annotation of Japan's earliest historical record "Nihon-syoki"(日本書紀),essays on ise-jingu,description of shinto.
In chapter1,2,3,I fouces on WataraiNobuyoshi(度会延佳),TatsuHirochika(龍熙近),YomuraHiromasa(与村弘正),to disscuss their cosmology and thoughts of shinnto.But I didn't attempt to clarify the construction of shinto in their thoughts.I examined what they want shinto to be.In chapter4,I compere their thought about san-kyo(三教),and research their annotation of "Nihon-syoki".From this work I manifested how they attain to their shinto ideals what we can comprehend from those discourses.
In chapter5,first I examined these shintoist's view of the world.Then I study the transitions which established by WataraiNobuyoshi(度会延佳),TatsuHirochika(龍熙近),YomuraHiromasa(与村弘正) ,by cases of NakanishiNaokata(中西直方), KawasakiNobusada(河崎延貞),and KisoKiyoari(喜早清在).